

先史琉球
の
生業と交易

6～7世紀の
琉球列島における
国家形成過程解明に向けた
実証的研究
(改訂版)

木下尚子・編集

甲元眞之

高宮広土

樋泉岳二

黒住耐二

杉井 健

小畑弘己

新里亮人

平成11～13年度

科学研究費補助金基盤研究(B)(2)研究成果報告書

研究課題番号 11410107

March 2003

熊本大学文学部

改訂版刊行にあたって

2002年3月に刊行した本報告書は、『史学雑誌』第112編第5号、『考古学ジャーナル』No. 502および『日本考古学年報』54（2001年度版）の学会動向記事において一定の評価をいただいた。

その後幸運にも科学研究費（日本学術振興会）を得、現在は新たな調査体制を組んで、ナガラ原東貝塚発掘調査を継続している。その過程の2002年秋、植物遺体を分析された高宮広土さんに、過去のナガラ原東貝塚調査で検出した残りのいいイネ3点を選んでもらい、これをAMS年代測定にかけたところ、すべて現代のものであるという結果がでた。これには共同研究者全員がおおきなショックをうけた。それまでは、6～8世紀としていた琉球列島最古のイネだったからである。この事実は、イネの検出を成果の一つとしていた報告書の結論に大きな影響を与える。検討の結果、イネの混入は非人為的攪乱によるもので、さらにこうした攪乱が多くの遺跡において普遍的に生じうることもわかった。前回までの報告にこの事実を加えることが、改訂版刊行の最大の理由である。

しかし改訂版の内容は、上記の年代測定報告を末尾に加えている以外、誤植や単純なミスを除いて2002年度版と同じである。各人の論点は、イネの所属年代を除いてもそれなりにほぼ成立すると判断したためである。

またこの機会に、「第4章 総括」の、英語、中国語ならびに韓国語訳を掲載した。「改訂版刊行にあたって」を含めた翻訳は、以下の諸氏にお願いした：

英語訳：Mark Hudson（筑波大学・札幌学院大学講師）

中国語訳：頼雲荘（熊本大学社会文化科学研究科 博士課程2年）

韓国語訳：朴天秀（韓国慶北大学校 助教授）、金姓旭（熊本大学文学研究科 修士課程1年）

なお、本書は平成15年度科学研究費補助金 基盤研究（A）（2）課題番号14201043により刊行する。

木下 尚子

2003年3月15日

Preface to Revised Edition

This report which was originally published in March 2002, has received favorable notices in a number of scientific journals including The Historical Society of JAPAN Vol.CXII, May 2003, The Archaeological Journal No.502,2003, Annual Report of the Japanese Archaeological Studies and Excavations 54 (Fiscal year 2001 April 2001~March 2002) .

After publication of the report, we were lucky enough to receive further funding from the Ministry of Education's Grant-in-Aid for Scientific Research and are continuing work at Nagarabaru-Higashi under a new project. In the autumn of 2002, we asked the project's paleoethnobotanist Prof.TAKAMIYA Hiroto to submit three rice samples for AMS dating. The results were all modern. This was a big shock for all members of the project because we had previously thought that the remains were from the 6-8th centuries and the oldest rice from the Ryukyus. These new dates naturally had a significant impact on the conclusions of the original site report. It was concluded that the rice was introduced into the site through natural disturbance and that such disturbance is probably common at most archaeological sites. These new conclusions were the main reason for the publication of a revised edition of the site report.

However, apart from the discussion of the rice AMS dates, the new edition is the same as the first publication except for spelling and other obvious mistakes. Most of the other analyses are not seriously affected by the new rice dates.

On this occasion I would also like to thank the following individuals for their help with translating the Conclusions and new preface into English, Chinese and Korean.

English translation: Mark Hudson (Adjunct Professor, University of Tsukuba and Sapporo Gakuin University) .

Chinese translation: LAI YunZhuang (Graduate School of Social and Cultural Sciences of Kumamoto University)

Korean translation: PARK cheon-su (KyongPook National University)

KIM sung-wook (Graduate School of Kumamoto University)

This report was published with a grant from Grant-in-Aid for Scientific Research (A) (2) for 2003 Project Number 14201043.

KINOSHITA Naoko

March, 2003

改訂版發行寄語

2002年3月發行的報告書，在《史學雜誌》第112編第5號、《考古學 ジャーナル》No.502 The Archaeological Journal No.502,2003 以及《日本考古學年報》54（2001年度版）的學會動向記事上獲得了一定的好評。

此後由于非常幸運地獲得了日本學術振興會的科學研究費，現在組建了新的調查體制，繼續進行 ナガラ原東 Nagarabaru-Higashi 貝塚的發掘調查工作。在2002年秋天的調查過程中，層請從事植物遺體分析的高宮廣土先生，選出了3件以前原東貝塚調查中檢出的保存狀態較好的稻種進行AMS年代測定，結果證實都是現代之物。這使得共同研究的全體成員都非常震驚。因為在此之前，都是作為6～8世紀的琉球列島最古的稻種。這一事實對於將稻種的檢出作為成果之一的報告書的結論造成了很大的影響。討論的結果，認為稻種的混入是一種非人為的攪亂，並且認識到這種攪亂可能在大多數的遺跡中都普遍存在。這次改訂版發行的最大原因就是將這一事實加入到之前的報告中。

我們認為即便不談稻種所屬的年代，各人的論點也都各自成立，因此改訂版的內容，除去在末尾加上上記的年代測定報告及一些印刷文字上的錯誤，都與2002年度版相同。

趁此機會，我們在《第4章 總結》部分，同時登載英語、漢語及朝鮮語文。包圍《改訂版發行寄語》在內的翻譯，由以下諸位擔任：

英語翻譯： Mark Hudson（筑波大學・札幌學院大學講師）

漢語翻譯： 賴雲莊（熊本大學社會文化科學研究科 博士課程2年級）、劉軍（熊本大學文學部 畢業生）

朝鮮語翻譯：朴天秀（韓國慶北大學校 助教授）、金姓旭（熊本大學文學研究科 研究生課程1年級）

另外，本書由平成15年度科學研究費補助金 基盤研究(A) (2) 課題號14201043 資助出版。

木下 尚子
2003年3月15日

개정간행에 즈음하여

2003년 3월에 간행된 본보고서는 『史学雑誌』 제 112 편 제 5 호, 『考古学ジャーナル』 No.502 및 『日本考古学年報』 54(2001년도 판)의 學會動向記事에 있어서 一定의 평가를 받았다.

그 후 다행히도 科学研究費(일본학술진흥회)를 받아, 현재는 새로운 조사체제를 구성하여 나가라바루(ナガラ原)東패총 발굴조사를 계속하고 있다. 그 과정에서 2002년 가을, 식물유체를 분석한 高宮広土씨로부터 과거의 나가라바루東패총 조사에서 검출된 상태 좋은 벼 3 점을 선택, 이것을 AMS 연대측정 하였으나 모두 현대의 것이라는 결과가 나왔다. 이 점에서 공동연구자 전원이 큰 충격을 받았다. 지금까지는 6~8세기였던 琉球列島 최고의 벼였기 때문이다. 이것은 이 결과를 성과의 하나로 했던 보고서의 결론에 큰 영향을 주는 것이다. 검토의 결과 벼의 混入은 비인위적인 교란에 따른 것으로서 더욱이 이러한 교란이 많은 유적에 있어서 보편적으로 발생하는 것이라는 사실도 알았다. 지난번까지의 보고에 이 사실을 附記하는 것이 이번 개정판을 간행하는 최대의 이유이다.

그러나 개정판의 내용은上記의 연대측정보고를 말미에 첨가한 이외, 誤植이나 단순한 실수를 제외하고는 2002년도 판과 같다. 각 연구자의 논점은 벼의 소속연대를 제외하고도 대부분 그대로 성립한다고 판단했기 때문이다.

또 이 기회에 「제 4 장 총괄」의 영어, 중국어 및 한국어 번역을 기재했다. 「개정판간행에 즈음하여」를 포함한 번역은 以下の 분들에게 부탁하였다 :

영 어 번역 : Mark Hudson (筑波大學・札幌學院大學講師)

중국어 번역 : 賴雲莊 (熊本大学社会文化科学研究科 博士課程 2年)

한국어 번역 : 朴天秀 (韓國 慶北大學校 助教授), 金姓旭 (熊本大学文学研究科 修士 1年)

더욱이 本書는 平成 15 년도 科学研究費補助金 基盤研究 (A) (2) 과제번호 14201043 에 따라 간행한다.

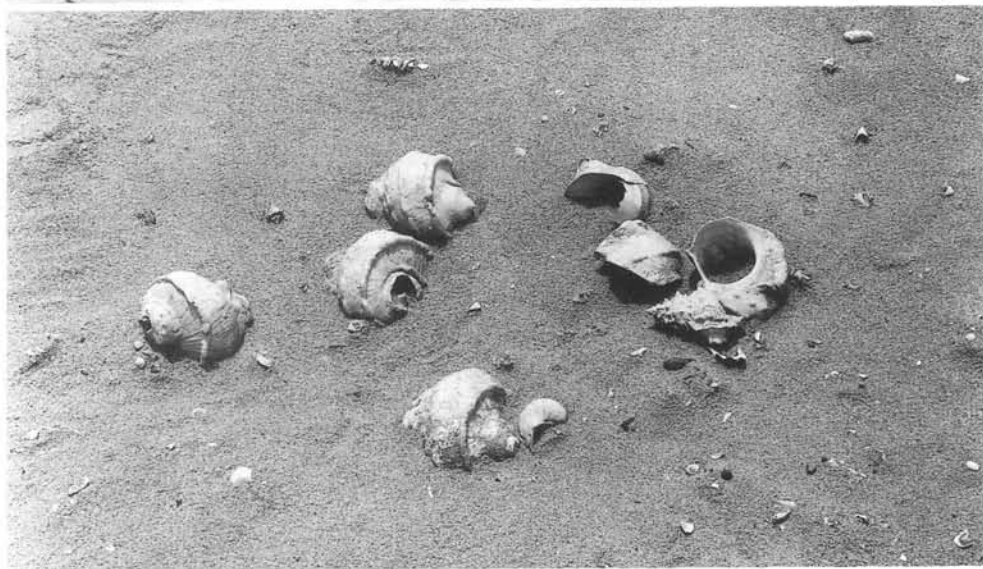
木下 尚子
2003년 3월 15일

图 版

図版 1



用見崎遺跡
遺跡遠景



ヤコウガイ出土状況



左 : 兼久式土器
右上 : 開元通宝(表)
右下 : 開元通宝(裏)



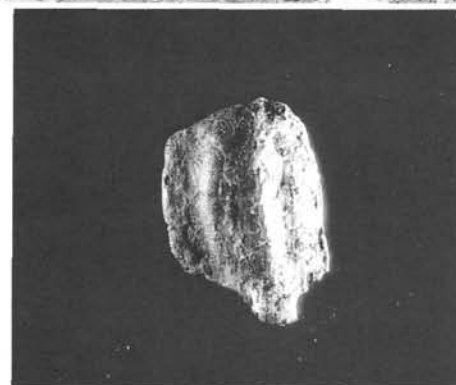
ナガラ原東貝塚
遺跡遠景



N2W1グリッド
貝類出土状況



左 : 土器(無文の甕)
右上 : イネ穎果(3.4mm長)
右下 : 貝符(下辺長 35mm)



目次
・
序
木下尚子

第1章
遺跡の概要と6～7世紀の琉球列島

木下尚子

第1節	用見崎遺跡の概要	3
第2節	ナガラ原東貝塚の概要	7
第3節	6～7世紀の奄美と沖縄	11

第2章
生業をめぐる諸問題

第1節	琉球列島の農耕のはじまり	甲元眞之	25
第2節	植物遺体からみた奄美・沖縄の農耕のはじまり	高宮広土	35
第3節	脊椎動物遺体からみた奄美・沖縄の環境と生業	樋泉岳二	47
第4節	貝類遺体からみた奄美・沖縄の自然環境と生活	黒住耐二	67
第5節	沖縄諸島における居住形態の変遷とその特質	杉井 健	87

第3章
交易をめぐる諸問題

第1節	貝交易と国家形成 ― 9世紀から13世紀を対象に	木下尚子	117
第2節	出土銭貨からみた琉球列島と交易	小畑弘己	145
第3節	滑石製石鍋の基礎的研究 ― 付 九州・沖縄における滑石製石鍋出土遺跡集成	新里亮人	162

第4章
総 括

木下尚子	193
CONCLUSIONS (訳: Mark Hudson)	198
총 括 (訳: 朴天秀)	206
總 括 (訳: 頼雲荘)	213

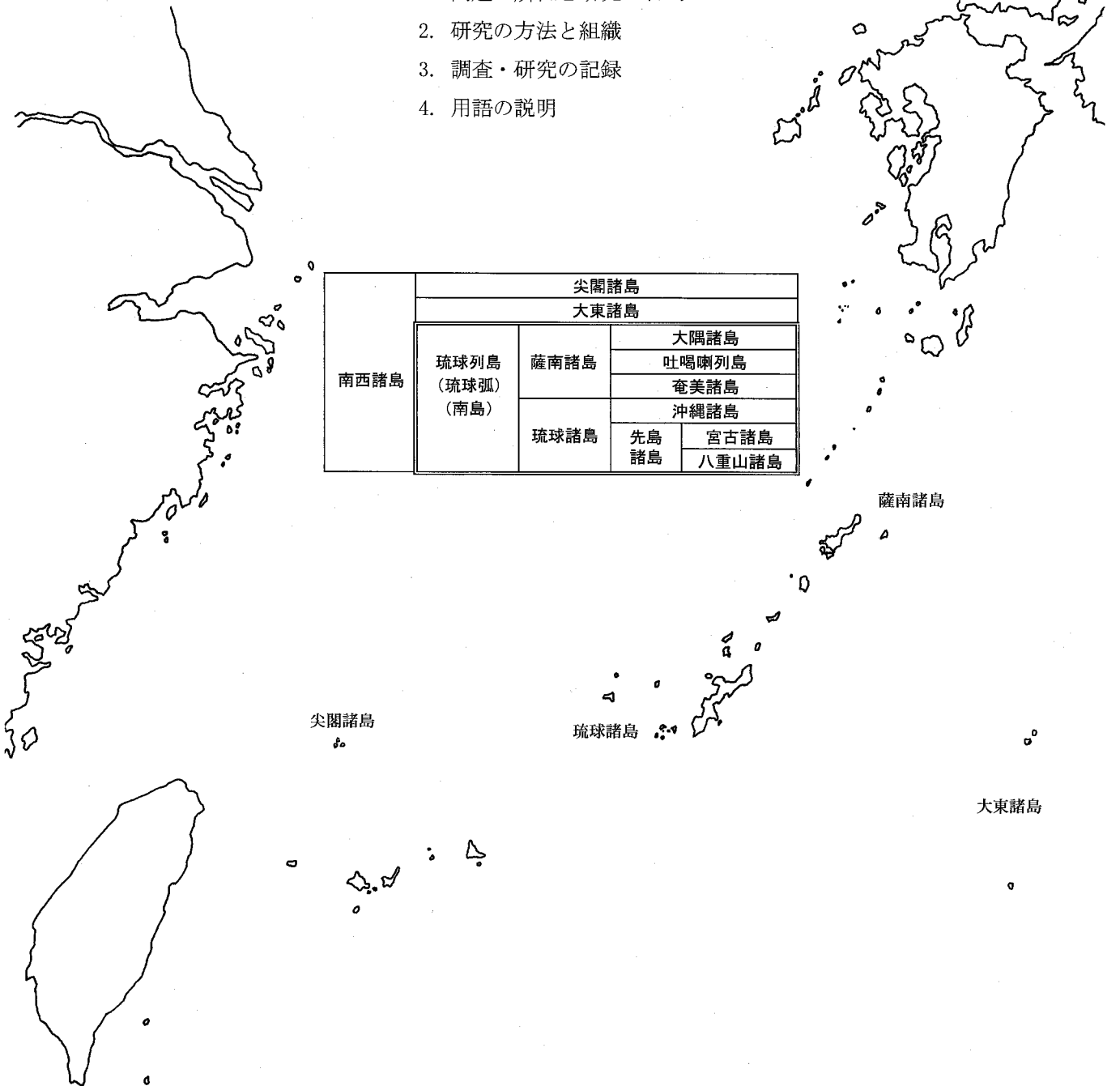
ABSTRACTS	221
-----------	-----

補 論
遺物包含層における現代イネ混入の検討

木下尚子	229
------	-----

序

1. 問題の所在と研究の目的
2. 研究の方法と組織
3. 調査・研究の記録
4. 用語の説明



南西諸島	尖閣諸島			
	大東諸島			
	琉球列島 (琉球弧) (南島)	薩南諸島	大隅諸島	
			吐噶喇列島	
		奄美諸島		
	琉球諸島	沖繩諸島		
先島諸島		宮古諸島		
		八重山諸島		

1. 問題の所在と研究の目的

琉球列島は、日本列島の南部に連なる大小188島嶼の弧状列島である。沿岸を北上する黒潮のために気候は熱帯的で、島の周囲には北限のサンゴ礁が発達する。島には低く平らな石灰岩地形が卓越し、人々は地下からの湧水に頼った生活をしてきた。河川は小規模で、沖積平野は少ない。琉球国は、こうした環境において15世紀初めに成立した国家である。それは、全長1000kmに及ぶ海域を支配した海洋国家であり、大和中央部以外で成立した唯一の独立国家でもあった。亜熱帯の島嶼域において国家はどのように形成されたのか、

なぜ一島（沖縄本島）が先島諸島を含む長大な海域を支配しえたのか。本研究の起点はここにある。

多くの琉球史研究で明らかにされているように、琉球国の建国は、明の朝貢貿易において優遇されたことが最大の要因であり、建国の支柱は明らかに対外貿易であった。こうした貿易を実現させたのは、12世紀以降登場する按司とよばれる首長たちであり、その活躍する時代はグスク時代（12世紀から15世紀前半）⁽¹⁾として区分されている。金武正紀、當真嗣一によると、この時代の特徴は、1. 稲作・麦作を中心とする農業社会であった、2. 鉄器生産が活発であった、3. 海外貿易が活発であった、4. 奄美大島から先島諸島までが同一文化圏として統一された、である（金武ほか1986）。グスク時代のめざましい社会の進展は、その前代に発展要因が準備されていたからである。しかしその前代、すなわち沖縄貝塚時代後期（以下沖縄後期）末（9世紀から11世紀）において、グスク時代につながる積極的状況は、畑作地である9～10世紀の遺跡が沖縄本島に一ヶ所知られる（那崎原遺跡）こと以外、よくわかっていない。また同後後半（6世紀から8世紀）の状況も不明な部分が多い。沖縄後後半から末期における土器の変化はゆるやかで、グスク時代

表1 交易を中心としてみた琉球列島の歴史

年代/時代 (大和)	琉球列島	中国
BC 3000	【沖縄貝塚時代 前期・中期】 →九州前期土器 →九州後期土器 →九州晚期土器 ←琉球列島土器	新石器時代 夏商周春秋戦国秦
BC 300	【沖縄貝塚時代 後期】 貝交易 →青銅器・鉄・穀物？等 ←大型巻貝	1. 貝交易 漢 魏晋南北朝
AD 250	古墳時代 貝交易 →鉄、穀物？ ←大型巻貝	五銖銭← 隋
600 700 800	飛鳥・奈良 【沖縄貝塚時代 後期】 ヤコウガイ交易 ヤコウガイ→ 開元通宝等← → 焼き塩壺・土師器・須恵器	2. 律令国家との交渉 唐
900 1000 1100	平安時代 【グスク時代への移行期】 ヤコウガイ・ホラガイ 交易 →須恵器・石鍋・陶磁 ←ヤコウガイ・ホラガイ	3. 農耕の開始 五代 宋
1200 1300	鎌倉時代 交易圏が初めて先島諸島に及ぶ	4. 小国分立 【グスク時代】 元
1400 1500	室町時代 中継貿易 東南アジア、日本、中国を結ぶ。自らは馬、硫黄、螺殻を輸出	明に進貢 5. 琉球王国 明

凡例：→ 琉球列島 ←：大和あるいは中国から、琉球列島にはいる
← 琉球列島 →：琉球列島から、大和あるいは中国に出る

の土器様式への鮮やかな変化とは一線を画している。農耕や交易で特徴づけられるグスク時代の状況は、変化の緩慢な沖縄後期からみると、突然のジャンプのように見えるのである。ただ後期後半の奄美諸島の遺跡からは、多種の鉄製品のほかに韃羽口がみつかり、鉄生産や沖縄後期末の農耕の開始など、グスク時代へのジャンプ力が前代においてゆっくりと準備されていたことを予測させてくれる。穏やかな準備と急激な変化が具体的にどのように進化したのか、本研究ではこのことを、遺跡の調査、環境復原、生業の追究を通して明らかにしようとしている。

本研究のもう一つの視点は交易である。表1は、紀元前3000年から紀元1500年間の琉球列島の歴史を、大和と中国の關係に注目して作成した模式的年表である。紀元前300年頃から紀元600年前後にかけて、大型貝類を需要・消費した大和と琉球列島の間、連続した交易關係を認めることができる(木下1995)。しかしこうした經濟關係も、その後大和に律令國家が成立するに伴い政治的關係に変化して冷却し、琉球列島は大和から遠ざかってしまう。その後大和との頻繁な關係が復活するのは、グスク時代初期(12世紀)である。つまり、交易においても7世紀から11世紀は空白なのである。

私はこの時期、琉球列島に出土する開元通宝(唐621年初鑄)に着目し、その分析から、琉球列島のヤコウガイが、7世紀以降唐で發達したヤコウガイ螺鈿の原料として交易された可能性の高いことを示した(木下2000)。ヤコウガイは、9世紀を境に中国から日本に消費の中心が移動するので9世紀以降は大和に対する交易品となった可能性が高い。またホラガイも10世紀以降、日本向けの交易対象となっている(木下1996)。表1はこうした貝交易研究の成果を加えたものである。このようにみると、空白の7世紀から11世紀の經濟活動にヤコウガイ交易を当てはめることが可能であり、これがグスク時代の海外貿易の開始と何らかの關係をもった可能性がでてくる。

本研究は、大きくは琉球列島における國家形成過程の歴史的理解を目指すものであり、具体的には、金武・當真両氏によるグスク時代の特徴(農耕、鉄生産、海外貿易、広域支配)がどのように形成されたのかを、とくに農耕と交易に重点をおいて、追究することを目的とする。

2. 研究の方法と組織

6世紀から7世紀に相当する沖縄諸島内遺跡の發掘調査を実施した。調査対象は伊江島ナガラ原東貝塚である。考古学と自然科学の連携を重視し、研究会と發掘調査を通して意見を交換しながら問題意識の共有に努め、調査・研究の深化を図った。なお、熊本大学考古学研究室では同目的の調査・研究を本研究開始以前の平成7年から實質的に始めているため、過去に実施したナガラ原東貝塚ならびに奄美大島用見崎遺跡の調査成果も、本報告の検討対象に加えた。

本研究の組織は以下のとおりである。

研究代表者	木下尚子	文学部・教授
研究分担者	甲元眞之	文学部・教授
	小畑弘己	文学部・助教授
	杉井 健	文学部・助教授
	黒住耐二	千葉県立博物館・上席研究員
	高宮広土	札幌大学文化学部・助教授
研究協力者	樋泉岳二	早稲田大学文学部・講師

本研究の経費は、以下のとおりである。

平成11年度	440万円
平成12年度	370万円
平成13年度	410万円
総計	1220万円

3. 調査・研究の記録

平成11年度

・発掘調査の実施

伊江島ナガラ原東貝塚第二次発掘調査を、平成11年7月12日～7月26日の15日間実施した。

調査主体：熊本大学文学部考古学研究室

現場統括者：杉井 健・谷 直子（大学院修士1年 当時）

・研究会の開催

期 日：平成12年3月20日～22日

場 所：熊本大学文学部考古学研究室

テーマ：1. 第二次調査成果の検討と第三次調査にむけての方針
2. 共同研究報告書について

発表者：木下尚子・杉井 健「ナガラ原東貝塚第二次調査の考古学的成果と展望」

黒住耐二「貝類からみたナガラ原東貝塚第二次調査の成果と展望」

高宮広土「植物遺体からみたナガラ原東貝塚第二次調査の成果と展望」

樋泉岳二「脊椎動物遺体からみたナガラ原東貝塚第二次調査の成果と展望」

小畑弘己「古代銭貨研究からみた南島」

甲元眞之「琉球列島の初期農耕研究の現状と問題点」

・発掘調査報告書の作成

谷 直子編「I ナガラ原東貝塚2」が2000年3月に完成（『考古学研究室報告第35集』熊本大学文学部考古学研究室 所収）

平成12年度

・発掘調査の実施

伊江島ナガラ原東貝塚第三次発掘調査を、平成12年7月27日～8月10日の15日間実施した。

調査主体：熊本大学文学部考古学研究室

現場統括者：杉井 健・新里亮人（大学院修士1年 当時）

その他：宮崎大学農学部藤原宏志、宇田津徹朗両氏が現場でプラントオパール試料を採取、分析した。

・研究会の開催

期 日：平成13年4月5日～6日

場 所：熊本大学文学部考古学研究室

テーマ：1. 第三次調査成果の検討と第四次調査にむけての方針
2. 共同研究報告書作成の方針、内容、作業計画

発表者：木下尚子「ナガラ原東貝塚と用見崎遺跡の比較研究」

黒住耐二「貝類遺体を通してみた中琉球における6～7世紀の推定される自然環境と生活実態」

高宮広土「植物遺体分析からみたナガラ原東貝塚と用見崎遺跡」

樋泉岳二「脊椎動物遺体分析からみたナガラ原東貝塚と用見崎遺跡」

小畑弘己「九州・沖縄における出土銭貨研究の現状と課題」

杉井 健「前方後円墳分布周辺地域における居住形態の比較研究にむけて」

甲元眞之「琉球列島の初期農耕研究の現状と問題点」

・発掘調査報告書の作成

新里亮人編「I ナガラ原東貝塚3」が2001年3月に完成（『考古学研究室報告第36集』熊本大学文学部考古学研究室 所収）

平成13年度

・発掘調査の実施

伊江島ナガラ原東貝塚第四次発掘調査を、平成13年7月15日～7月29日の15日間実施した。

調査主体：熊本大学文学部考古学研究室

現場統括者：杉井 健・木村龍生（大学院修士1年 当時）

・研究会の開催

期 日：平成13年12月15日～16日

場 所：熊本大学文学部考古学研究室

テーマ：1. 共同研究報告書作成のための研究発表

2. 共同研究報告書完成にむけてのうちあわせ

発表者：木下尚子「沖縄貝塚時代後期をどう捉えるか」

黒住耐二「貝類分析からみたナガラ原東貝塚とその位置付け」

高宮広土「植物遺体からみた6～10世紀の生活史復元」

樋泉岳二「脊椎動物遺体からみた6～7世紀の琉球列島の環境と生活史」

杉井 健「琉球列島における居住形態の特質とその意義」

甲元眞之「琉球列島の農耕のはじまり」

・発掘調査報告書の作成

木村龍生編「I ナガラ原東貝塚4」が2002年3月に完成（『考古学研究室報告第36集』熊本大学文学部考古学研究室 所収）

4. 用語の解説

本書で使用する基本用語等について示す。

琉球列島 琉球弧と同義語。九州と台湾の間に、北は種子島から南は与那国島に至る約1200kmの広がりをもつ弧状列島をさす地質学・地理学用語。一連の地体構造をもち、洋島である大東諸島と大陸棚上にある尖閣諸島を含まない。本研究の対象地域である。

南西諸島 琉球列島に大東諸島と尖閣諸島をくわえた範囲をさす用語。明治20年頃の水路部によって命名された官製地名であり、形式地域名とされる（目崎1985 pp. 8～9）。

南島 『続日本紀』文武天皇2（698）年に、種子島、屋久島、吐喝喇列島、奄美諸島を指す総称と

して登場した歴史的用語。その包括する範囲は時代とともに拡大し、最終的に現在の琉球列島と重なる。おもに島外人が、琉球列島の文化や歴史的事象を扱う場合に使用してきた。これらの関係を目崎茂和に拠って模式的に示せば、本章扉の表ようになる（目崎1985）。

地質学的区分 地質学では、琉球列島の地質上の構造間隙により、これを北琉球、中琉球、南琉球と呼びわけるのが一般的である（木崎1985）。すなわち、北琉球と中琉球は吐喝喇列島上のトカラ構造海峡(トカラギャップ)で分けられ、中琉球と南琉球は宮古凹地(ケラマギャップ)で分けられる。

文化圏区分 國分直一によって示された南島北部圏、中部圏、南部圏（北部諸島、中部諸島、南部諸島とも）が一般的である（國分1966、1972a、1972b）。國分は、大隈諸島を北部圏とし、縄文・弥生時代を通じて九州文化圏に属するとみた。奄美・沖縄諸島、吐喝喇列島宝島を含む地域を中部圏とし、独自の文化を有する地域とみた。先島諸島を南部圏とし、台湾、フィリピンなどの南方とかかわりの深い文化を有するとみた。國分の区分は地質学的な地域区分に符合する。このほか金武正紀らによる沖縄圏、先島圏（金武ほか1986）、安里嗣淳による北琉球圏、南琉球圏の区別がある

（安里1991）。本書では國分の定義を用いる。

大和 日本列島のうち琉球列島及び北海道以外の地域を指す便宜的用語として、本書に限って使用する。こうした地域を示す適当な表現について共同研究者内で議論したが、これに匹敵する適当な用語がみつからなかった。

沖縄貝塚時代後期 沖縄考古学会が1978年に発表した編年案による時代区分名称（沖縄県考古学会1978）。弥生時代中期から平安時代初期までを含む。後続するグスク時代との境界の時期について論争が続いている。右にその編年表を示す。

先史土器文化編年略表

沖縄貝塚時代	搬入遺物等	¹⁴ C年代	大和の時代区分
早期	九州の縄文前期土器	6670 ± 140BP 4530 ± 75BP	縄文前期
前期	南九州後期の土器	3370 ± 80BP 2980 ± 70BP	縄文後期
中期	明刀銭	2710 ± 80BP 2420 ± 75BP	縄文晩期～ 弥生前期
後期	九州弥生中期土器	2000 ± 85BP 1630 ± 80BP	弥生中期～ 古墳時代～
	開元通宝	1130 ± 75BP 1190 ± 60BP	平安時代 初期
グスク	稲作開始 貿易陶磁出土		平安時代～ 鎌倉時代

（沖縄考古学会 1978、p.38 表をもとに作成 一部改変）

（注）

（1）グスク時代の始まりの時期については議論があり定まっていないが、ここでは12世紀説をとる。

（参考文献・アルファベット順）

安里嗣淳 1991 「中国唐代貨銭『開元通宝』と琉球圏の形成」 『文化課紀要』第7号、沖縄県教育委員会

木下尚子 1995 『南島貝文化の研究』法政大学出版局

木下尚子 1996 「南島交易ノート—古代・中世における法螺とホラガイの需要」 『東アジアにおける社会・文化構造の異化過程に関する研究』平成6～7年度科学研究費補助金一般研究（B）研究成果報告書、pp. 57～88

木下尚子 2000 「開元通宝とヤコウガイ—7～9世紀の琉・中交易試論」 『琉球・東アジアの人と文化』（上巻）、pp. 187～219。

金武正紀・當真嗣一 1986 「沖縄における地域性」 『岩波講座日本考古学5』岩波書店

木崎甲子郎編 1985 『琉球列島の地質誌』沖縄タイムス社、p. 5

國分直一 1972a 「南島の先史土器とその編年」 『南島先史時代の研究』慶友社

國分直一 1972b 「三つの道をめぐって」 『日本民族文化の形成』慶友社

國分直一 1966 「南島の先史土器」 『考古学研究』第13巻第2号、pp. 31～45

目崎茂和 1985『琉球弧をさぐる』沖縄あき書房

那覇市教育委員会 1996『那崎原遺跡』那覇市文化財調査報告書第30集

沖縄県考古学会 1978『石器時代の沖縄』新星図書